

2010年 春号

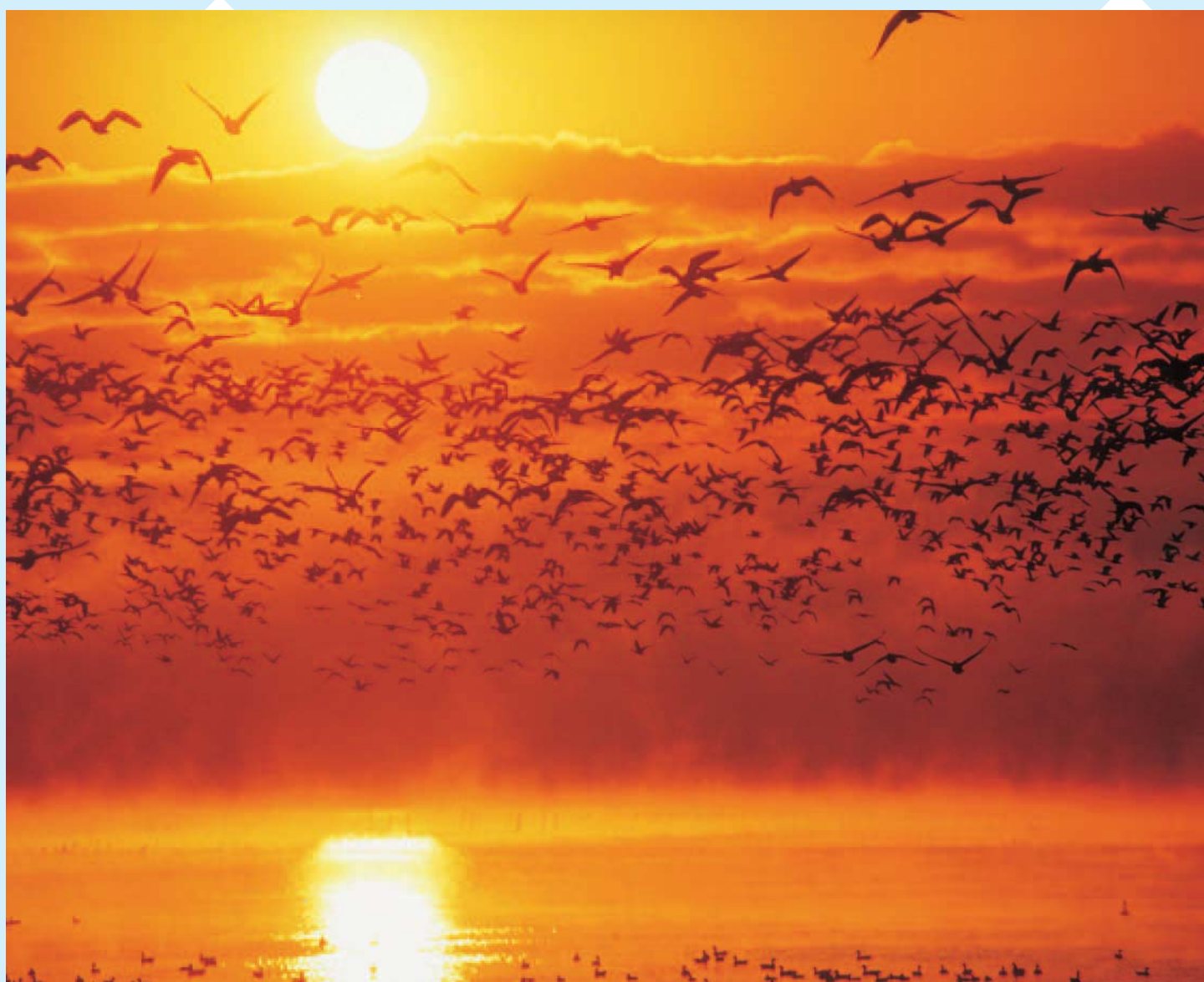
戸山サンライズ

特 集

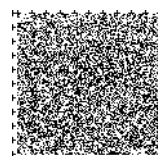
バンクーバー2010パラリンピック冬季競技大会

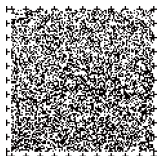
スポーツ

今後の競技スポーツの発展に向けて



全国身体障害者総合福祉センター





←これは、SPコードです。
専用読み取り装置の使用により、誌面の内容の音声出力が可能です。

第24回障害者による書道・写真全国コンテスト

写真部門 金賞「伊豆沼はサンクチュアリー(聖地)」
仙台市 渡辺 照子

(作品PR)

伊豆沼はその日の天候によってその場に行ってみないとわからない。何度か通い太陽が出てきた時の感動、鳥たちが飛び立つ時の感動は、寒さなど忘れてシャッターを切る。この時期はとても楽しんだ。

(寸評)

バイパスによる環境破壊に対して鳥達を守ってこられたことは、存じております。その愛情が「生命の輝き」のこの写真を造り出したのです。シャッターを切った時の心の熱さ。



このコンテストは、障害者の文化活動等の推進を図ることで技術の向上、自立への促進並びに積極的な社会参加を目的として、(財)日本障害者リハビリテーション協会(全国身体障害者総合福祉センター)の主催により毎年開催されているものです。第24回を迎えた今回のコンテストでも、全国各地より292点(写真部門)にのぼる素晴らしい作品の数々が寄せられました。

目次

2010年春号

■特集：バンクーバー2010パラリンピック冬季競技大会

バンクーバー2010パラリンピック冬季競技大会の報告—(財)日本障害者スポーツ協会 1
日本選手団主将からみたバンクーバーパラリンピック ————— 新田 佳浩 6

■スポーツ

今後の競技スポーツの発展に向けて ————— 中森 邦男 9

■ライフサポート

「地域における障害者の栄養・健康状態の実態及び
意識・ニーズ調査研究」結果報告(その1) ————— 政安 静子 13

■ライフサポート

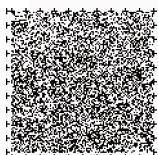
「社会保険Q & A」 ————— 高橋 利夫 16

■レクリエーション

『障害者と共に創る文化・芸術活動ワークショップ』を開催しました! — 廣田 清志 17

■お知らせ

戸山サンライズからのお知らせ ————— 20



バンクーバー2010パラリンピック 冬季競技大会の報告

(財)日本障害者スポーツ協会

1 大会名称

バンクーバー2010パラリンピック冬季競技大会
(通称：バンクーバー冬季パラリンピック)
Vancouver 2010 Paralympic Winter Games

2 開催期間

2010年3月12日(金)開会式～21日(日)閉会式
【10日間】

3 開催国・都市

カナダ・バンクーバー(アイススレッジホッケー、
車いすカーリング)
ウィスラー(アルペンスキー、クロスカントリー
スキー/バイアスロン)

4 運営主体

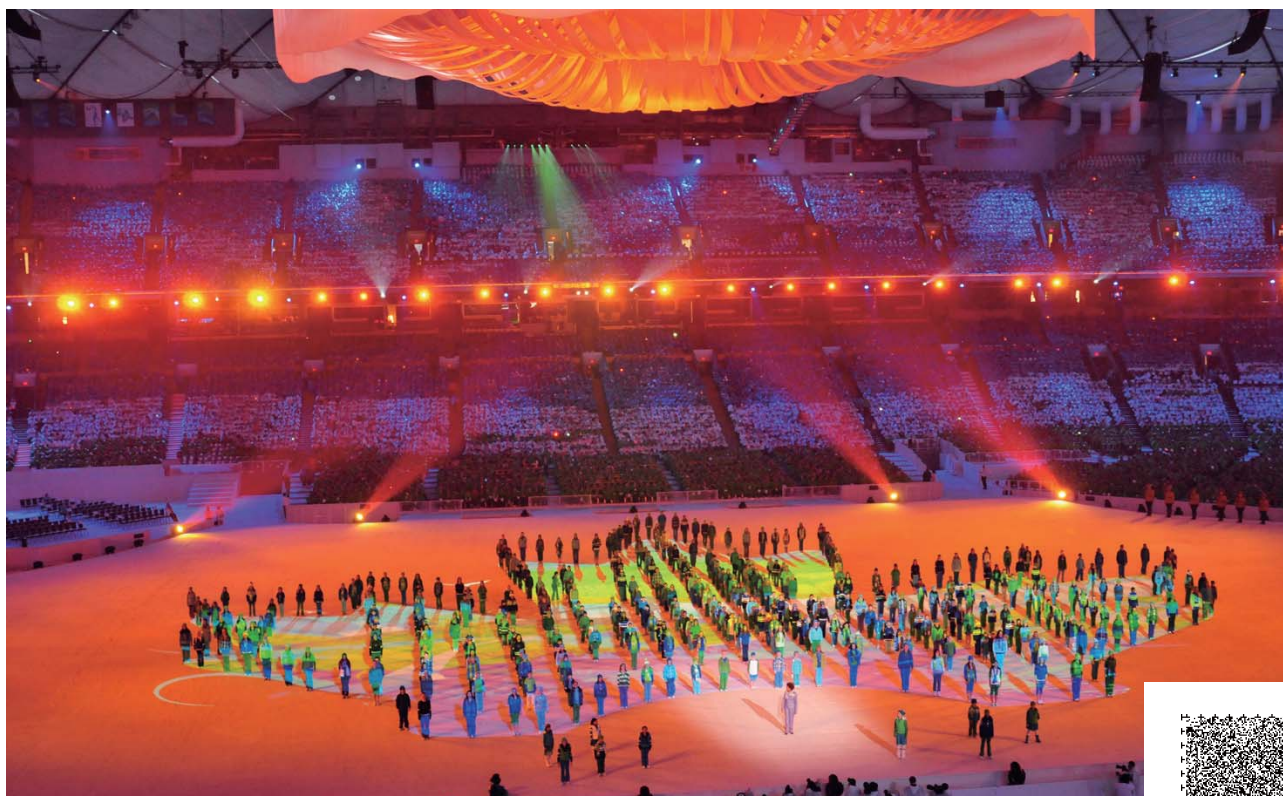
国際パラリンピック委員会 (IPC)
バンクーバー2010オリンピック・パラリンピック
組織委員会 (VANOC)

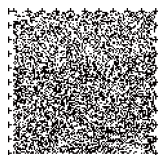
5 参加国 44カ国

6 参加選手数 502人

7 実施競技(5競技)・会場

- 1) アルペンスキー
ウィスラー・クリークサイド
- 2) クロスカントリースキー・バイアスロン
ウィスラー・パラリンピックパーク
- 3) アイススレッジホッケー(8か国参加)





バンクーバー・UBC サンダー
バードアリーナ

4) 車いすカーリング (10か国参加)

バンクーバー・パラリンピックセンター

* 選手村は、山岳地域 (ウイスラー) と市街地域
(バンクーバー) の2ヶ所に設けられた。

8 特記事項

1) 新種目として、アルペンスキーにスーパーコンバインド (スーパーG+SL)、バイアスロンにパシュート (追抜き)・クロスカントリースキーにスプリントが実施された。

2) 北京大会同様にパラリンピック開催が、IOCとIPCの下記事項で扱いが一緒になった。

- ①選手と割り当て役員のエントリーフィが無料
- ②オリンピック同様の規則の適用 (エントリー関係、ドーピング、メディア、マーケティング等)
- ③大会1年前に、団長会議を実施

9 日本選手団

1) 選手団の編成

①参加人数 94名

選手41名・ガイドスキーヤー1名・役員52名

②団長 中森 邦男 (財団法人日本障害者スポーツ協会)

③主将 新田 佳浩 (クロスカントリースキー/バイアスロン)

④旗手 遠藤 隆行 (アイススレッジホッケー)

⑤競技別参加者数 (表1)

2) メダリスト

①金メダル

新田 佳浩 クロスカントリースキー

男子立位 10km クラシカル

男子立位 1km スプリント

アルペンスキー

男子座位 スーパーG

狩野 亮



②銀メダル

森井 大輝 アルペンスキー

男子座位 ダウンヒル

太田 渉子 クロスカントリースキー

女子立位 1km スプリント

アイススレッジホッケーチーム 15名

③銅メダル

森井 大輝 アルペンスキー

男子座位 スーパーG

狩野 亮 アルペンスキー

男子座位 ダウンヒル

鈴木 猛史 アルペンスキー

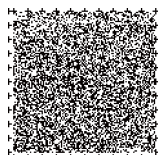
男子座位 大回転

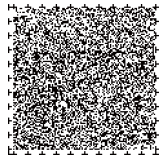
大日方邦子 アルペンスキー

(表1) 競技別参加者数

No	競技名・本部役員	選手数			G	役員数			合計
		男子	女子	計		男子	女子	計	
1	アルペンスキー	10	3	13		10	2	12	25
2	クロスカントリースキー	5	3	8	1	11	2	13	22
3	バイアスロン								
4	アイススレッジホッケー	15	0	15		6	2	8	23
5	車いすカーリング	3	2	5		2	4	6	11
6	本部役員					9	4	13	13
	計	33	8	41	1	38	14	52	94

* Gは、ガイドスキーヤー





女子座位 回転

女子座位 大回転

④その他の入賞者

- A アルペンスキー 青木辰子 三澤 拓
 B クロスカントリースキー／バイアスロン
 久保恒造 出来島桃子 鹿沼由理恵
 佐藤圭一

3) 競技別報告

①アルペンスキー

悪天候により大幅に競技日程が変更され、日本チームはこの影響をまともに受けることとなったが、男子でスピード系の種目で初めて2人がメダルを獲得し、スーパーGでは金メダルを獲得することができた。スラローム、大回転とあわせ7つのメダル獲得となった。



- ②クロスカントリースキー・バイアスロン
 日本チームが得意としていたバイアスロンは、

ロシアを始めとする上位陣の射撃のミスがほとんどなく、メダル獲得はならなかった。しかし、クロスカントリースキーのクラシカル種目では、選手の競技力向上とあわせ、ワックスワークがあたり、2つの金メダル、1つの銀メダル獲得となった。

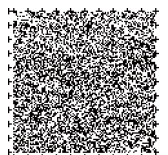
③アイススレッジホッケー

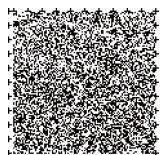
予選リーグで連勝し、3戦目で敗戦となったが、初めて準決勝進出となった。準決勝では、苦戦を予想されたが、地元カナダ相手に互角に渡り合い、ゲーム終了間際で勝ち越し、そのまま勝利した。決勝のアメリカ戦は、2点は入れられたものの、相手に遜色のない攻撃を見せてくれ、銀メダル獲得となった。



④車いすカーリング

初めてパラリンピックに参加し、予選リーグで9戦し日本を含め5チームが3勝となったが、対戦国間





の勝敗により10位となった。メダルを獲得した国に勝つなど3勝し、これからの強化により次回に希望が持てる成績であった。

4) 特記すべき事項

- ①アイススレッジホッケーで銀メダルを獲得した。これは団体競技で夏冬を通じ、過去最高の成績であり、男子で初めてのメダル獲得となった。
- ②クロスカントリースキー男子クラシカル10km、スプリントクラシカルで金メダルを獲得した。男子のクロスカントリースキーでは初めての金メダル獲得となった。
- ③アルペンスキー男子スーパー G で金メダルを獲得した。男子スピード系種目で初めての金メダル獲得となった。
- ④アルペンスキー男子滑降、男子スーパー G で複数の選手がメダルを獲得した。
- ⑤クロスカントリースキー女子スプリントクラシカルで銀メダルを獲得した。女子立位でクロスカントリースキーでは初めてのメダル獲得となった。

- ⑥遠藤選手が日本人として初めて大会優秀選手表彰（ファン・ヨン・デ功績賞）授賞
- ⑦海外で開催されたパラリンピックで、過去最高の成績であった。
- ⑧日本は、実施競技全てに参加資格を獲得し、参加した。
- ⑨質の高いボランティアの支援
- ⑩高いメディアの関心と日本からの多くの報道記事

5) まとめ

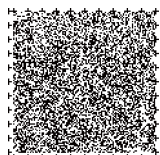
日本選手団の金メダルランキングは8位であった。選手団の目標である全競技でメダル獲得は達成できなかったが、アイススレッジホッケーは夏、冬のパラリンピック団体競技で初の銀メダル、男子でメダル獲得、複数の競技で3つの金メダル、計11個のメダルと大変質の高い成績をあげることができた。

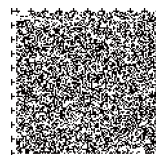
この成果は、選手の競技力とあわせ、監督、コーチ、メカニック、ワックスなどチームワーク・組織力の勝利であった。

6) 成績比較（表2）

（表2）成績比較

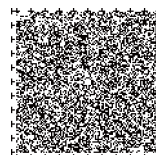
競 技 名	2002 年ソルトレーク大会					2006 年トリノ大会					2010 年バンクーバー大会				
	選手数	メダリスト数	成 績		計	選手数	メダリスト数	成 績		計	選手数	メダリスト数	成 績		計
			メダル数					メダル数					メダル数		
1 アルペンスキー	14	1	金 0 銀 0 銅 2		2	17	4	金 1 銀 4 銅 1		6	13	4	金 1 銀 1 銅 5		7
2 クロスカントリースキー バイアスロン	8	1	金 0 銀 0 銅 1		1	8	2	金 1 銀 1 銅 1		3	8	2	金 2 銀 1 銅 0		3
3 アイススレッジホッケー	15	0	金 0 銀 0 銅 0		5位 / 6	15	0	金 0 銀 0 銅 0		5位 / 8	15	15	金 0 銀 1 銅 0		1 (2位 / 8)
4 車いすカーリング						0		金 銀 銅			5	0	金 0 銀 0 銅 0		10位 / 10





＜資料 メダルランキング＞

No	国 名	バンクーバー大会						トリノ大会					
		Rank	金	銀	銅	計	選手数	No	Rank	金	銀	銅	計
1	ドイツ	1	13	5	6	24	20	1	2	8	5	5	18
2	ロシア	2	12	16	10	38	31	2	1	13	13	7	33
3	カナダ	3	10	5	4	19	45	3	6	5	3	5	13
4	スロバキア	4	6	2	3	11	13	4	13	0	1	1	2
5	ウクライナ	5	5	8	6	19	19	5	3	7	9	9	25
6	アメリカ	6	4	5	4	13	50	6	5	7	2	3	12
7	オーストリア	7	3	4	4	11	19	7	7	3	4	7	14
8	日本	8	3	3	5	11	41	8	8	2	5	2	9
9	ベラルーシ	9	2	0	7	9	9	9	11	1	6	2	9
10	イタリア	10	1	3	3	7	35	10	9	2	2	4	8
11	フランス	11	1	4	1	6	21	11	4	7	2	6	15
12	ノルウェー	12	1	3	2	6	27	12	12	1	1	3	5
13	スペイン	13	1	2	0	3	5	13	13	0	1	1	2
14	スイス	13	1	2	0	3	15	14	13	0	1	1	2
15	ニュージーランド	14	1	0	0	1	2	15		0	0	0	0
16	オーストラリア	15	0	1	3	4	11	16	13	0	1	1	2
17	フィンランド	16	0	1	1	2	5	17		0	0	0	0
18	韓国	17	0	1	0	1	25	18		0	0	0	0
19	スウェーデン	18	0	0	2	2	25	19	19	0	0	1	1
20	ポーランド	19	0	0	1	1	12	20	10	2	0	0	2
21	チェコ	19	0	0	1	1	18	21	17	0	1	0	1
22	イギリス					0	12	22	17	0	1	0	1
23	アンドラ					0	2	23		0	0	0	0
24	アルメニア					0	2	24		0	0	0	0
25	ベルギー					0	1	25		0	0	0	0
26	ブルガリア					0	3	26		0	0	0	0
27	チリ					0	2	27		0	0	0	0
28	中国					0	7	28		0	0	0	0
29	クロアチア					0	4	29		0	0	0	0
30	デンマーク					0	2	30		0	0	0	0
31	ハンガリー					0	2	31		0	0	0	0
32	イラン					0	1	32		0	0	0	0
33	カザフスタン					0	1	33		0	0	0	0
34	メキシコ					0	2	34		0	0	0	0
35	モンゴル					0	2	35		0	0	0	0
36	スロベニア					0	1	36		0	0	0	0
37	南アフリカ					0	1	37		0	0	0	0
38	アルゼンチン					0	2						
39	ボスニアヘルツェゴビナ					0	1						
40	ギリシア					0	2						
41	アイスランド					0	1						
42	オランダ					0	1						
43	ルーマニア					0	1						
44	セルビア					0	1						
	ラトビア							38		0	0	0	0
	合計		64	65	63	192	502						
total (44 NPCs)								total (38 NPCs)					



日本選手団主将からみた バンクーバーパラリンピック

日本選手団主将
新田 佳浩

近年のパラリンピックは、オリンピックとパラリンピックを同等に扱うというシステムが海外では出来てきている。その影響もあり、競技性が高まってきている。それは、冬季では初となるオリンピックのカナダ代表となったクロスカントリースキーのブライアン・マキーバーが証明している。

そのような中で金メダル3つを含む、11個のメダルを獲得することが出来たことは、日本チームの快挙であると感じている。今回の活躍の要因を挙げていきたいと思う。

・ワックスについて

今回、スキー会場になったウィスラーは、例年に比べて積雪が少なく大会期間中にレースが出来なくなる可能性もあったため、アルペン会場では雪の下にドライアイスを敷いてコースを作り、クロスカントリー会場でも、雪を維持するため硫安ではなく天然の塩を撒いてコースを作ったという話を聞いている。自然の雪に人工的なものが入ったことで、雪の結晶が変わっていた。

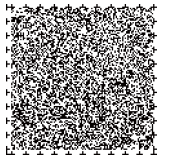
クロスカントリーチームは、オリンピックのクロスカントリーチームのワックスマンと連携をとり、オリンピック期間中に滑ったワックス、そして気温や雪温の情報を事前に入手できたことは大きかった。また、2年前にカナダのナショナルカップに出場したとき、気象状況の変化、ワックスの選定の難しさを痛感した。そのため今回はどんな

状況でも対応できるようにワックスマンを4名つけてもらい、最高の板で滑ることが出来たのではないかと思います。

特にクラシカル競技では、滑る(グライダーワックス)と止まる(グリップワックス)を使用するのだが、グリップワックスが勝敗を左右すると言っても過言ではない。このグリップワックスで勝敗を分けた象徴的なレースが、大会最終日に行われたスプリントクラシカル競技だった。

予選、準決勝、決勝と3レース戦うこの競技は、体力的にきついのはもちろんのこと予選から決勝まで2時間以上かかってしまう。そのため気温の上昇、雪面の変化に対応したワックスを塗る必要がある。このレースでは、まず予選を通過するためにスリップしないことに重点を置きグリップゾーンを長めに塗ってもらった。障害に応じてスタートする本選の準決勝では、タイム差なしだったため、自分が先行してレースを展開する作戦だったため、予選より若干グリップワックスの長さを短くしてもらった。決勝では、9秒後にLW4の片足に障害がある選手が追いかけてくる展開だったため、登りでリードを保ち、平地で逃げ切るという作戦を取った。そこで平地での滑走性を考えて、登りでギリギリ止まるグリップワックスの量にしてもらったことが、今大会2つ目の金メダルに繋がったと思う。





一方アルペンチームは、ワールドカップ期間中は個人がワックスを塗り、パラリンピック期間中は専属のワックスマンがついて、コンディショニングトレーニングに当てる時間をもらったことで肉体的な疲労は軽減されたと思うが、日常的なリズムが狂い時間を持て余すことがあったかもしれない。

スキーという道具を使うこのスポーツでは、ワックスの選択も非常に重要になってくる要素であるため、今後はワールドカップ、世界選手権などの主要大会、主要レースでは、専属のワックスマンが常時帯同できる環境作りが必要ではないかと思う。

・メカニクについて

アルペンのチェアスキーチームが、金メダル1個を含む7個のメダルを獲得した影には、アルペンチームの主将である森井君を中心としたチェアスキーのポジション、ウエイトのバランスなどを協力頂いたメーカーだけでなく、選手同士がより良いチェアスキー、海外の選手に勝つためにギリギリまで調整した成果であると思う。

クロスカントリーでは、LW2の瀧上選手が下腿切断で日本初のパラリンピックに出場した。海外では膝下の障がいでも立位のクラスに出場することはあるが、膝上の選手は座位のクラスで出場している。そのような中、自分の可能性を信じて、義足の開発、改善を行いパラリンピックの出場権を獲得した。パラリンピック直前のワールドカップで義足の破損などもあったが、今回、メカニックの方がバンクーバーまで来ていただいたことに感謝している。今大会は、狙っている種目で14位という結果ではあったが、義足の改良が更に進めば世界で戦える力を充分持っているため、これからに期待したいと思う。

・各競技のチームの雰囲気について

・アルペンチーム

個人競技ではあるが、森井君を中心としてチェ

アスキーチームはまとまっていたような印象を受けている。また、世界で勝つために何をしなければいけないのか？どういう心構えでパラリンピックに臨まなければならないのか？というものをチームメイトの狩野君、鈴木君が感じ、切磋琢磨していたと思う。

立位のクラスのエースである三沢君も言葉にこそ出さないが強い気持ちを持ってパラリンピックに臨んでいたことがわかった。結果的には6位だったが、次のソチに向けてのメダルの可能性を見せてくれたと思う。小池君、今大会で競技を引退する井上さんも、今ある力を最大限発揮してくれたと思う。

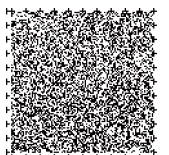
・クロスカントリー・バイアスロンチーム

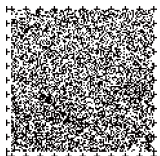
バイアスロンを中心に上位を目指したが、射撃のミスもあり、上位進出はならなかったが、出場した8選手中4名が初出場で、3名が入賞と素晴らしい成績だったと思う。また個人的なことになるが、10km クラシカル競技で金メダルを獲得後にメダルセレモニーでスタッフだけでなく、全選手がセレモニーに参加してくれたことが、大変嬉しくそのような雰囲気を作ってくれた荒井監督とクロスカントリー・バイアスロンチームの長田主将に感謝したい。

・アイススレッジホッケー

2大会連続の5位で大変悔しい想いをし、特にトリノパラリンピックでは1敗の重さを実感しただけに、今大会にかける想いを各選手強く持っていた。緒戦のチェコ戦の勝利で波に乗ることができ、韓国戦も勝利した。予選最終戦のアメリカ戦で負けたものの、監督の想定範囲内だったということから、世界での自分たちのポジションを知り、そして戦略をしっかり把握できていたことが伺える。

今大会優勝したアメリカチームは無失点優勝だったことが、「悔しい」と遠藤主将は言っていたが、チーム競技としてパラリンピックで銀メダル獲得は素晴らしいと思う。





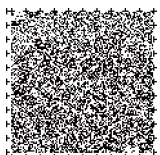
・車いすカーリング

トリノから正式種目になり、今大会初出場になった車いすカーリングチームではあったが、強豪国相手に3勝を上げた要因は、チームでのコミュニケーション、そしてそれまで支えられた多くの方がいたからだと思う。予選リーグで敗退になったが、このチームワークを緒戦から出すことが出来れば、結果は大きく違っていたと思う。

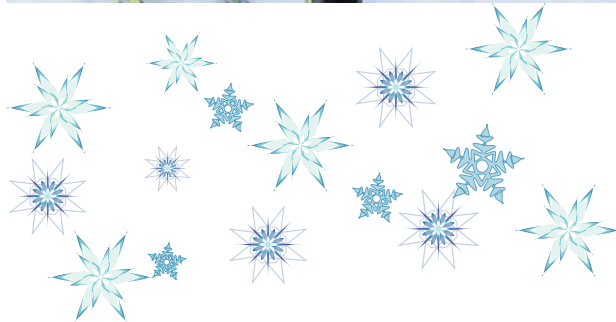
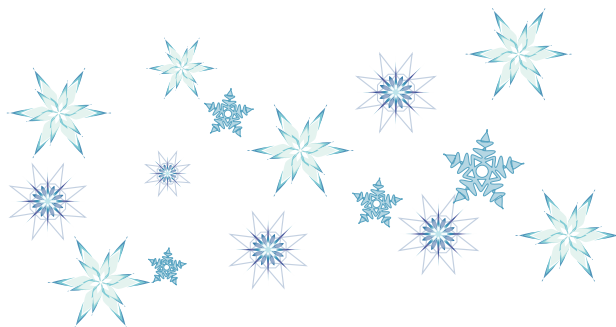
そして何より、今回主将としてチームを作っていく上で車いすカーリングチームの他の競技のコミュニケーションを心配していたが、特集番組の収録が同日だったので早めに行って出来るだけ話す機会を作り、結団式ではキャプテンの中島さんを始め各選手と話すことを心がけたが、成果があったか疑問を持っていたが解団式の時、車いすカーリングの選手から私に声をかけてもらい、今回私が心がけたことが少しでも成果となったことが嬉しかった。

「気持ちは伝染する」。大会期間中、前半は大田方さん、鈴木君の銅メダル3個だったが、後半8個のメダルを獲得することができた。それは、私の金メダルがきっかけで、ホッケーチームの「金メダルを取ったのに負けられないと思って、カナダ戦を戦いました。」と言ってくれた遠藤選手。そして「新田さんの金メダル、そしてホッケーのカナダに勝って銀メダル以上が確定して、アルペンチームも負けられないと思いました、」「やっぱり金メダルっていいもんですね。僕たちも明日金メダルを目指しますよ」と言ってくれた森井君、狩野君。次の日は見事狩野君が金メダルを獲得してくれた。この言葉に表れているように、気持ちや思いは伝染すると感じさせてもらえる機会でもあった。

次の戦いは、ロシアのソチ。今大会金メダル13個を含む38個のメダルを獲得したロシアが地元になること



を考えると4年後は大変厳しい戦いになる。また、今後更なる脅威となるロシアに打ち勝つためには、チームの活動費、国内外での合宿、そして次に続くジュニア選手の普及、育成というシステムが確立できなければ、今大会以上の成績は臨むことが出来ないのではないかと危惧している。





今後の競技スポーツの 発展に向けて

日本パラリンピック委員会

中森 邦男

1 パラリンピックの現状

2010バンクーバーパラリンピック冬季競技大会（第10回冬季大会）は、オリンピックに引き続き2010年3月12日（金・開会式）から21日（日・閉会式）までの10日間、バンクーバー市と山岳地域のウイスラーで開催され、過去最多の44カ国から502人の選手が参加し、5競技に熱戦が繰り広げられました。

パラリンピックは、2001年に国際オリンピック委員会と国際パラリンピック委員会が合意書を交わし、2008年のオリンピック招致にパラリンピック実施が含まれることが決定し、冬季大会ではバンクーバー大会が初めての大会となりました。

リハビリテーションから始まったパラリンピックは、回を重ねる毎にエリート化が進み、北京パラリンピックでは、開催国を初めとするオリンピック同様国を挙げて強化をする国が増えてきました。バンクーバーでは、開催国のカナダの大きな躍進はありましたが、参加国が少ないこともあり、上位国の変動は少ない状況で、北京大会ほど上位国のメダル集中はありませんでした。

今回日本は、海外のパラリンピック冬季大会で過去最高の成績を上げることができましたが、夏の大会同様、競技のエリート化は進んでおります。この世界の動きの中で、日本選手が競技力向上、パラリンピックでの成績向上を目指すための方向を探っていききたいと思います。

2 バンクーバー大会での日本選手の活躍

バンクーバー大会での日本選手団の成績目標は、

①全競技でメダル獲得、②複数の競技で金メダル獲得、③10個以上のメダル数という高い目標を設定しました。結果、初めて参加した車いすカーリングは予選で3勝をあげることができましたが、準決勝に進むことができず、目標である全競技のメダル獲得はかないませんでした。その他3競技で、金メダル3、銀メダル3、銅メダル5個のメダルを獲得し、団体競技では夏冬のパラリンピックをとおり、過去最高の成績となり、男子で初めてのメダル獲得となったアイススレッジホッケーの悲願の銀メダル、初めてクロスカントリースキーで金メダルを獲得した男子クラシカル10km、スプリントクラシカル、男子スピード系種目で初めて金メダルを獲得したアルペンスキー男子スーパージGなど歴史的な成績を上げることができました。

この成果の背景には、いくつかのポイントが上げられます。一つは、ソルトレーク大会以降、競技団体が実施してきた企業協賛活動、強化活動などのパラリンピックでの成績向上を目的とした組織的取り組みが実を結んだこと。二つめは、準備作業として代表選手がパラリンピックにおいてベストコンディションで競技に臨めるように、コーチ・役員・支援役員の編成を行ったこと。三つめは、選手が大会において競技力を100%、それ以上発揮したこと。四つめは、大会中、チームスタッフが選手に対し最高の支援を行ったこと。

しかし、4年後のソチ大会を見据えたとき、バンクーバー大会以上の好成績を期待することについて、各競技団体は現在の状況に大きな危機感を持っています。

3 競技スポーツの現状

パラリンピックはオリンピックと同じように、人間の限界を迫り、最先端のスポーツ科学に裏づけされたトレーニングがなければ勝てない状況になりました。現在の日本における競技スポーツの状況を(財)日本障害者スポーツ協会、競技団体及び選手に分けて整理してみました。

1) (財)日本障害者スポーツ協会

国の機関である厚生労働省のスポーツに対する支援は、障害者の自立支援の範疇で行っており、事実上、日本障害者スポーツ協会が日本を代表し、競技及び地域スポーツの振興を担っています。その活動資金は、国庫補助金、公的資金及び寄付金であり、安定した強化や組織運営ができない状況にあります。エリート化が進む中、国際機関、パラリンピックの参加やドーピングなど、数少ない職員での対応は限界を越している状況にあります。

2) 競技団体

傘下の競技団体は、ボランティアが中心となり、事務所、職員は殆どない状況です。資金も本協会を通じた助成金で中心で、希望する活動が制限されている。メディア対応、ドーピング対抗などもオリンピック同様に要求されるが、手が一杯の状況となっています。

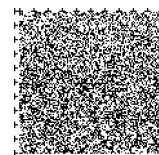
3) 選手

日本代表を含め選手は多額の強化費を自己負担し、1年間の平均は個人競技で、100万円、団体競技では、300万円となっています。資金のない選手は、強化活動が十分にできず、潜在的な有力選手や経済的余裕のないユース選手は、資金面で断念しているケースが多いと予測されます。

また、フィジカルコーチ、トレーナー、栄養、メンタル、動作解析など競技団体が支援できない強化活動では選手個人が資金を負担しており、さらに、練習場所も、障害のために利用できないことや練習場所が限定されるために移動時間などに無駄が生じている状況にあります。

オリンピックとパラリンピックの比較(競技団体)

		オリンピック	パラリンピック
本部機能	法人格	法人格を持っている	殆ど法人格がない
	専従職員	有 り	殆どがない
	事務所	有 り	殆どがない
	資 金	多 い	少ない
		国庫補助金	国庫補助金
		スポーツ振興センター	障害者スポーツ支援基金
	スポンサー	多 い	少ない
専門 スタッフ	組織運営	職 員	ボランティア
	監 督	職 員 ボランティア ・ 大学等の教員 ・ 公的研究機関 ・ 民間クラブなど	ボランティア ・ 障害者 SC 職員 ・ 学校教員 ・ 民間企業職員 ・ 公務員など
	コーチ		
	サポートスタッフ		
	フィジカルコーチ		
	メンタルスタッフ		
	栄養スタッフ		
	動作解析スタッフ		
	体力測定スタッフ		
	メディカルスタッフ	ボランティア (大学や医療機関など)	ボランティア又はいない (大学や医療機関など)



選手が自己負担した1年間の強化費

No	金額		%	1人平均	
1	50万円 未満		20.40%	夏季	冬季
2	50 万円 以上	100 万円 未満	34.90%	102万円	163万円
3	100 万円 以上	150 万円 未満	18.40%		
4	150 万円 以上	200 万円 未満	11.80%		
5	200 万円 以上		11.20%		
6	不明		3.30%		

* 2008 パラリンピアンズ協会調査 (N=152 北京・トリノパラ代表選手)

選手が自己負担した強化費の内容

1	遠征費	85.50%
2	合宿参加費	65.80%
3	スポーツ道具・器具	31.60%
4	競技用車椅子・義足	27.60%
5	治療 (マッサージ・鍼)	15.80%
6	ウェア	15.10%
7	通常の練習	9.20%
8	通常練習以外のトレーニングジム費	6.60%
9	施設使用料	3.90%
10	コーチ	2.00%
11	その他	4.60%

* 2008 パラリンピアンズ協会調査 (N=152 北京・トリノパラ代表選手)

4 今後の競技スポーツの発展に向けて

1) 資金確保

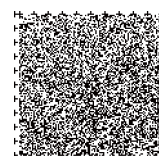
競技団体の組織的運営、組織的強化及び選手の強化費の自己負担解消には、まず資金確保が第1の要件で、主なものは次のように考えられます。

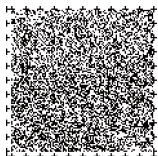
- ① (財) 日本障害者スポーツ協会による国庫補助金、公的資金及び民間資金の増額・確保
- ② 競技団体による公的資金及び民間資金の増額・確保と民間企業による強化支援
- ③ 選手に対する民間企業の強化資金提供と民間企業による強化支援

北京パラリンピックでは、障害者スポーツの公的支援が不十分であると関係者の認識もあり、北京大会後は新規の国庫補助が厚生労働省により実施されました。しかし、ますますエリート化する競技スポーツへの支援 (資金) はまだまだ少ないのが現状です。これら3者が、それぞれの立場で資金を確保する方法を工夫し進んでいくことが必要と考えます。

2) 組織的運営

バンクーバーパラリンピックで好成績を上げた背景には、ソルトレーク以降取り組んだ、競技団体の組織的取り組みが大きな成果となったことは非常に喜ばしいことです。パラリンピックで好成績を上げるための戦略として、事務所の設置、事務職員の配置、専用練習場所の確保 (コーチが常駐)、国際大会への参加、選手の職場支援、強豪国との定期的対戦計画など、そして必要な資金確保のために企業協賛活動を積極的に実施したことです。しかし、支援コーチや支援スタッフ (メカニック、トレーナーなど) の経済的な支援は難しく、好成績の陰には献身的なボランティアに頼っていたことも事実です。さらに冬の競技は、雪上練習や限られた氷上練習には、練習そのものに多額の費用が発生し、選手には常に経済的負担があったことも事実です。





3) 選手強化の役割分担

前記のとおり、強化の役割は選手、競技団体と国内統括団体（日本パラリンピック委員会）の3つに分け考える必要があります。その役割は次のように考えられますが、資金に裏付けられているわけではありませんので、現状として、選手の日常の強化は競技団体が強化合宿などを通し指導しています。

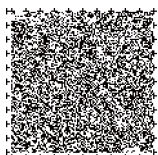
4) まとめ

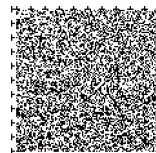
日本障害者スポーツ協会は、厚生労働省と文部

科学省などの政府関係者、障害者スポーツ議員連盟やスポーツ議員連盟などの国会議員と連携を取り、日本の障害者スポーツの振興に対する根本的な支援を訴えているところです。

しかし、現状は、いまある資金の中で可能なことを進めるしかないと思いますが、ロンドン、ソチ、さらにその先のパラリンピックでの好成績を見据え、資金調達を含め長期計画を立てて、計画的に強化を進めることが大切だと思います。

	競技者（日常練習）	競技団体	J P C
練習・トレーニング	○		
コーチ	○	コーチの養成・資質向上	コーチの養成・資質向上
フィジカルトレーニング	○	支援スタッフの養成 支援体制の確立	長期強化計画の立案 資金確保 支援体制の確立 データの収集・分析・活用 選手のマルチサポート
栄養	○		
メンタル強化	○		
動作解析	○		
体力測定	○		
義肢・用具の改良	○		
トレーナー	○		
医 師	○		
強化合宿	練習・トレーニング体験 強化計画の理解 代表選手の心構え ドーピングの理解 国際の規則・クラス分けの理解	選手の強化 必要事項の講習・研修	事業計画の立案・実施 資金確保
国際大会参加 （海外派遣）	国際経験 ポイント獲得	競技チームのシュミレーション コーチの経験 パラ参加枠の獲得 選手の競技支援	事業計画の立案・実施 資金確保
研修会		必要事項の共通理解	事業計画の立案・実施 資金確保
ドーピング対応		スタッフ養成	
国際組織との連携		国際スタッフの養成	
T D ・ T O 養成		国際競技規則及び国際クラス分けの管理と適用	
クラシファイアー養成		強化策	資金の確保
海外からのコーチ招聘		資金の確保	
報奨金			
強化（組織）基盤の整備	強化資金の確保 支援企業の獲得 ブログなどの活用	組織運営の基盤整備 事務所、職員、資金 強化資金の確保 支援企業の獲得 ブログなどの活用	組織運営の基盤整備 事務所、職員、資金 強化資金の確保 支援企業の獲得 ブログなどの活用





「地域における障害者の栄養・健康状態の実態及び意識・ニーズ調査研究」結果報告(その1)

(社)日本栄養士会 全国福祉栄養士協議会
協議会長 政安 静子

はじめに

現行の制度において障害児(者)の入所施設を利用している場合は、栄養スクリーニング・栄養アセスメント・栄養ケア計画・実施・モニタリングという流れに沿った栄養ケア・マネジメントによる栄養管理が実施されていますが、地域で生活する障害者の栄養・健康状態の実態や栄養・健康状態に関する意識・ニーズについて、わが国ではほとんど明らかになっていません。

そのため、地域で生活する障害者への専門家による食生活・栄養支援が十分になされておらず、食生活、食行動等に関する課題や身体状況による課題などの改善についてはほとんど取り組まれていないのが現状です。

このようなことから、地域で生活する障害者が生涯にわたり健やかな健康と質の高い生活を維持することが困難となることが危惧されます。したがって、地域で生活する障害者が、自立した生活と自己実現を目標に社会参加の継続を可能とするには、食生活・栄養支援が行える体制づくりとともに、健康の維持改善を図るための栄養・食生活支援に何が求められているのかを探り、栄養ケア・マネジメントの技法を確立し、効果的な栄養ケア・マネジメントの実施が必要と考えました。

そこで、有効性の高い科学性を有する研究によって「地域で生活する障害者の栄養・健康状態の実態や栄養・健康状態に関する意識・ニーズ」を明らかにすることができれば、地域で生活する障害者の栄養ケア・マネジメントの方向性と栄養・食生活支援の内容を決定する上で有益であると考え、厚生労働省平成21年度障害者保健福祉推進事

業(障害者自立支援調査研究プロジェクト)の補助金により、全国のグループホーム・ケアホームと通所授産施設を利用している障害者を対象に多施設共同による横断研究を実施したので報告します。

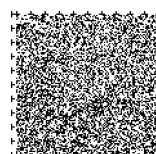
栄養・健康状態の実態や栄養・健康状態に関する意識・ニーズ調査

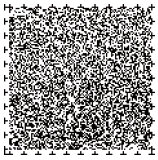
1. 研究計画・方法ならびに対象者

グループホーム・ケアホーム、通所授産施設を利用している障害者(20歳~69歳)を対象に、栄養・健康状態の実態及び意識・ニーズについての質問票を作成し、対象施設及び関連法人の管理栄養士・栄養士等を通じて郵送にて収集しました。

その調査内容は、栄養・健康状態の実態を把握するために、身長、体重、下腿周囲長(ふくらはぎの周り)、移動機能レベル、知能指数、アメリカ精神遅滞協会(AAMR)分類による知的障害の原因疾患、食材の購入方法、主に食事を作る人の環境要因に関する調査と栄養・健康状態に関する意識・ニーズに関する調査とを実施しました。なお、栄養・健康状態に関する意識・ニーズを把握するための質問項目については、オープン式グループ・インタビュー調査を実施し、その調査から得られた質問項目を整理して作成しました。

最初に、対象施設を抽出するために、全国日本知的障害関係施設・事業所名簿((財)日本知的障害者福祉協会発行)等から対象となる法人等の名簿を作成しました。その名簿から対象となるすべての法人に対して簡易な調査趣旨(目的や内容)を記載し





た協力依頼書と返信用の FAX 用紙を郵送により送付し、研究への参加の有無を調査しました。そして、参加の意思を示し、参加を承諾した施設を研究対象施設といたしました。

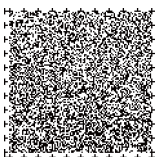
調査対象施設には郵送により質問票を送付して、それぞれの施設の法人に勤務する管理栄養士・栄養士が調査担当者の中心となり、その施設を利用している利用者に対して、意思疎通ができる場合は本人に、困難な場合はその家族の 1 人に研究内容を口頭にて説明し、同意が得られた利用者を研究の対象としました。

調査担当者は調査を行ったうえで、記入済みの調査票を研究事務局に送付し、研究事務局では、データに不備や不明な点がある場合は、調査担当者に問い合わせを行い、情報の不備を可能な限り排除しました。

インタビュー調査に参加したのは23施設（グループホーム・ケアホーム13施設・通所授産施設10施設）であり、栄養・健康状態の実態及び意識・ニーズ調査は327施設（グループホーム・ケアホーム215施設・通所授産施設112施設）、対象者は3,672人（グループホーム・ケアホーム2,078人・通所授産施設1,594人）でした。なお、この研究は、特定非営利活動法人日本栄養改善学会倫理審査委員会の承認を得た上で実施しました。

2. 結果

栄養・健康状態における身体状況では、国民健康・栄養調査の対象者より低身長・低体重であること。男性ではやせと肥満が多いこと。女性は肥満の率が高く、肥満度も高値を示していることが明らかになるとともに、男女とも太っている・やせているという意識を持っていることが分かりました。下腿周囲長については、男女とも BMI によるやせ群、普通群、肥満群では、肥満度がやせから普通・肥満になるほど数値が増加していることから身長や体重が計測できない場合の指標として下腿周囲

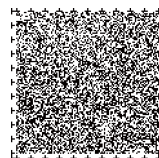


長を活用することが可能であると示唆されました。移動レベルでは、約 9 割以上の対象者が走るまたは歩けることから運動をすることは可能であると判明しました。運動は余りされていないが、健康のために運動は必要であると意識されていることが確認できました。

知的障害の原因疾患では、「原因不明」と「記録がないので不明」が約70%を占めており、原因疾患について解析できる対象者は、染色体異常289人と精神医学的障害226人でした。染色体異常による知的障害者は、全対象者より低身長・低体重にもかかわらず BMI が全対象者の数値より高いことが判明しました。精神医学的障害による知的障害者は身長と体重においては全対象者と大きな差はなかったが、BMI においては高いことが分かりました。

対象者の意識・ニーズの質問では、食事への関心が高いこと、生活のリズムがとれており、朝食を食べる30分前に起床し、就寝3時間前に夕食を食べている。睡眠時間は6時間以上とっており、自分は健康だと思っている人が多いということが分かりました。ただし、自分は健康だと思っていない人でも食事への関心は高く、アルコールを飲む人とタバコを吸っている人はグループホーム・ケアホーム群（以下「GH 群」という。）のほぼ毎日タバコを吸っている11.2%を除き10%以下と少ないことが分かりました。また、GH 群と通所授産施設群（以下「通授群」という。）との比較においては、毎日お菓子を食べている率は GH 群に比べて通授群が52.3%、食べる速度が速いのは54.5%、良く噛まないで食べる58.5%と高かった。また、通授群は月1回の体重測定は62.8%、食後の歯磨き61.5%と GH 群に比べて低いという状況でした。

健康管理及び栄養アセスメントの重要な指標である体重測定については、GH 群は比較的月1回測定されているが、通授群では積極的に計測されていないことが分り、通授群は毎日お菓子を食べている人が多く、GH 群の男性は炭酸飲料や砂糖入りの飲料を飲んでいる人が多く、間食と夜食の両方を食べている人は BMI が高いことが分かりました。



対象者の食材購入方法と食事への関心の関係については、近くの店、宅配業者、関連施設いずれの購入方法においても90%以上の人が食べることに興味、美味しいと感じる、毎日3食食べると答えているが、関連施設では残さずに食べるについて「はい」と答える人が若干少ない傾向にあり、残している人がいることが分かりました。

なお、生活リズムがとれていなくても3度の食事を食べ、睡眠時間を6時間とっており、生活リズムがとれていない原因としては、食事を食べ残すことや朝食の30分前に起床ができないなどがあげられました。

自分は健康だと思っていない人でも食べることに関心が高く、朝食の30分前の起床、就寝3時間前に夕食を食べ、健康のために運動は必要だと思っており、自分は太っていると思っている人が多く、タバコを吸っている率も高率でした。

毎日3度の食事を食べていない人は食べることに関心が若干ではあるが低く、健康だとは思っていないが、健康のため運動は必要だと思っており、食後に歯磨きをしている人は少なく、便秘になる人が多く、喫煙率も高率でした。また、毎食食事を残している人は便秘になる率が、3度の食事を食べていない人より高率でした。

噛む速度が速い者はよく噛まないで食べ、噛む速度が遅い者はよく噛んで食べていることがわかりました。歯が欠けていて硬いものが噛めない人は、約5～6割の人が虫歯や歯槽膿漏があり、食べ物をよく噛まないと答えていました。虫歯や歯槽膿漏がある人の半数は治療のために通院していました。また、歯があっても噛むことができても食べ物をよく噛まない人が通授群で約5割と高率であり、食後に歯磨きをしない人で虫歯や歯槽膿漏がある人は約4割存在していました。

便秘または喫煙と食欲との関係では、便秘のない人、タバコを吸わない人に比べると便秘のある人、タバコを吸っている人の方が、若干ではあるが食欲に影響があることが分かりました。

主に食事を作る人が、情報として一番知りたい

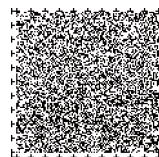
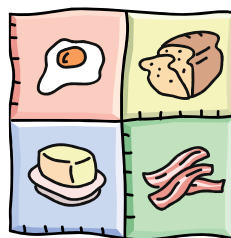
内容は、GH群も通授群も簡単にできる料理、安価で美味しい献立であり、GH群では病気になった時の栄養や食事内容、献立と料理のコツが知りたいというニーズが主であり、通授群では低カロリー食品や食事バランスのとり方を詳しく知りたいが主であることから、グループホームの世話人と通所授産施設の利用者の保護者等が求めている情報内容に大きな差がありました。

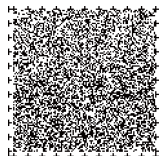
さらに、食べ物に気をつけていない群においても食べ物に気をつけている群と同様の比率で、食事内容と調理に関する情報が必要とされており、個別対応の重要性が示唆されました。

おわりに

今回の結果は、地域で生活する障害者の栄養・健康状態の実態の把握、栄養・健康状態に関する意識・ニーズを直接に証明したものであり、食生活・栄養指導を中心とする栄養ケア・マネジメントをすることが重要であることを強く示すものであると考えられます。

特に、全国のグループホーム・ケアホームの管理者、通所授産施設の施設長、関連法人の施設長はじめ担当者の皆様のご協力・ご支援をいただき、全国レベルで明らかにできたことであり、これにより地域で生活する障害者並びに障害者の支援者等に対して質の高い食生活・栄養支援が可能となり、体制整備の充実を図ることができると確信できました。最後に、調査の担当者並びに参加者のご協力に感謝申し上げますとともに、調査研究のご指導・ご支援していただきました東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻社会予防疫学分野教授佐々木敏先生に心より深謝申し上げます。





社会保険 Q&A

(問) 4月3日に35歳の誕生日を迎えた者です。日本年金機構から「ねんきん定期便」がきました。昨年も社会保険庁からきましたが、この取扱いについて、どうしたものか教えてください。

(答) 1 日本年金機構の発足

これまで年金事務を運営していた社会保険庁が廃止され、平成22年1月から新たに「日本年金機構」が設けられて、厚生労働大臣の監督の下に年金の業務運営を担わせることとされました。これに伴い「社会保険事務所」は、「年金事務所」と名称が変わりました。

「日本年金機構」は、国民の信頼にこたえることができる運営体制により、安定的な事業運営に当たる非公務員型の年金法人であり、サービスの向上、効率的、効果的な業務遂行を図るものです。

2 2回目の「ねんきん定期便」

今年度も4月2日以降に生まれた人から2回目の「ねんきん定期便」が送られます。

21年度に送付された「ねんきん定期便」は、すべての国民年金及び厚生年金保険の被保険者にこれまでの加入記録がすべて表示されていました。

(1) 年金加入履歴

22年度からの「ねんきん定期便」は、35歳、45歳、58歳の年齢の人には、21年度と同様に、これまでの全加入期間の記録を表示して知らせることとされています。

(2) 「最近の月別状況です」

上の年齢以外の人には、直近1年分の国民年金については、保険料の納付状況、厚生年金保険については、被保険者期間中に納めた保険料、その算定の基となった標準報酬月額等を知らせる

よう簡略化されています。この点が、21年度と異なった扱いになっています。

(3) 記録の作成表示

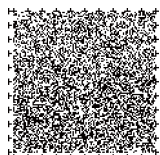
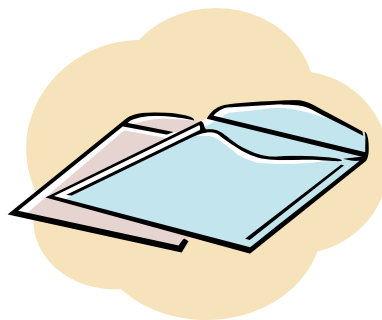
「ねんきん定期便」は、作成年月日(誕生日前々月)の前々月までの記録が表示されることになっています。例えば、4月が誕生日の人は、12月までの年金記録が表示されることで統一されています。

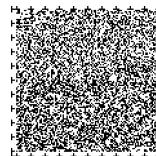
「最近の月別状況です」には、13か月分の年金記録が表示されます。例えば、4月が誕生月の人の場合は、12月までの記録が表示されますが、12月分の国民年金保険料を納付期限である翌月(1月)末日までに納めても、2月の作成日までに金融機関から情報提供が間に合わないと12月分が「未納」と表示されますので、翌年度の「ねんきん定期便」で再度12月分を表示して確認できるようにされます。

(4) 年金加入記録回答票の扱い

記録を確認して、年金加入記録に「もれ」や「誤り」がある場合は、必要事項を記入の上、同封の返信用封筒により返送する必要があります。「もれ」や「誤り」がない場合は、返送する必要はありません。

(回答：社会保険労務士 高橋 利夫)





『障害者と共に創る文化・ 芸術活動ワークショップ』を開催しました！

戸山サンライズ
廣田 清志

平成22年2月6日・7日の2日間、全国身体障害者総合福祉センター（戸山サンライズ）において、『障害者と共に創る文化・芸術活動ワークショップ』を開催しました。

このワークショップは平成21年度全国生活協同組合連合会の助成事業として実施した『障害者レクリエーション・サポートマニュアルの作成・配布事業』の一環として行われたもので、障害者と健常者が共に芸術活動を行う楽しさ、大切さを確認してもらえれば、という考えから企画を進めていきました。

今回企画したプログラムは4つ。造形、ダンス、音楽、演劇（即興劇）を皆さんに体験していただきました。

各プログラムの内容をご紹介します。

■造形ワークショップ■

講師の正木隆先生は、筑波大学附属大塚特別支援学校中学部で教鞭をとりながら、金属彫刻家としても活躍しています。

今回は真鍮（ちゅう）板を使ってレリーフと半円の器作りに挑戦しました。

3時間があっという間に過ぎてしまったと感じるくらいに皆さん作品作りに没頭していました。

レリーフ作り（写真①）



下絵に沿って板に刻みをつけていきます。違うところを叩かないように集中！

器作り（写真②）



最初は浅い金型から徐々に深い器にしていきます。この時、同じところを叩きすぎると金属疲労を起こして板が破れてしまうので注意。

完成した作品の一部（写真③）

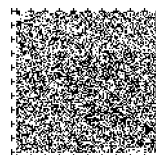


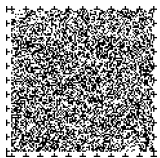
それぞれの作品を研磨剤で磨いて最後に透明な塗料で塗装すると完成です！！

■ダンスワークショップ■

講師はこども教育宝仙大学の松原豊先生。

振り付けのある踊りではなく、日





常生活の中の動作や言葉から動きを切り取って何かを生み出したり、簡単な小道具を使って遊びながら表現をしていき、結果的に『面白い!』と感ずることができれば、それが一つの「アート」として成立する、ということはこの時間で実践していただきました。

マッサージ・体ほぐし (写真④)

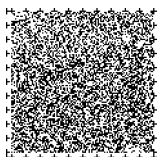


遊び感覚で触れ合いを行うことによって、ボディイメージやノンバーバルコミュニケーションの力を養います。

動きの質を利用した即興表現 (写真⑤)



相手の体の周りにヒモを張っていくイメージ。ヒモを張る方向や速度の変化、相手との関係で「直線的な軽い」動きを即興で表現していきます。



言葉の語感を動きで表現する (写真⑥)



他者・道具・言葉などの刺激や手がかりを使った即興的な表現で創造性を養っていきます。この写真は力行の語感を表現しているところです。

■音楽ワークショップ■

講師はシュピールハウスという音や動きなどを使った教室を主宰している柴田礼子先生です。

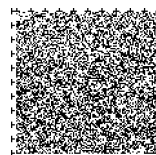
音楽を目的ではなく手段として活用してコミュニケーションや表現活動に用いて、参加者それぞれの表現を大切にしていきます。

今回のテーマは『春色コンサート』。参加した皆さんのイメージした『春』を色と音で表現しました。

春色コラージュ作品製作中 (写真⑦)



グループに分かれて台紙に自分たちの選んだ春をイメージした紙を張っていきます。この色を選んだ理由などを話しながらにぎやかに進んでいきます。



コンサート開始（写真⑧）



各グループで作った紙と自分が気に入った楽器を使ってコンサート。クリスマスの曲を演奏するグループがあったり、何が出るかは楽しみ!!

■演劇（即興劇）ワークショップ■

ワークショップの最後は俳優としても活躍している庄崎隆志先生と即興劇に挑戦です。

聴覚障害をもつ先生は、言葉を使わないワークショップを各地で開催しています。

言葉を使わなくても皆さん楽しんでコミュニケーションをとっていました。

新聞を使った演劇（写真⑨）



テーマは「待ち合わせ」。ただし、待ち合わせているのはライオンと女子高生!?出会ったときのフィーリングで一緒に行動できたり、素通りしたり…。

見えない縄跳びを跳ぶ（写真⑩）



見えない縄跳びの回転に合わせてみんなでジャンプ!回している人のタイミングが合うと、縄が見えてくるのが不思議です。

今回のワークショップでは4人の講師にそれぞれの分野での活動の一端を紹介していただきました。

「創作・表現活動に言葉がほとんど必要ない」こと、そして「自分を表現することに正解・不正解はない」ことが、皆さんに共通していた考え方だったと感じています。

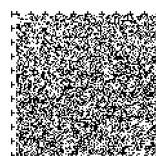
皆さんも芸術というものを難しくとらえずに、表現活動の一部として挑戦してみてはいかがでしょうか?

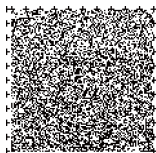
文章や写真だけではワークショップの雰囲気が伝わりづかったと思います。『ユニバーサルアートへの招待～障害者レクリエーション・サポートマニュアル～』に当日の様子やその他の活動も掲載しています。



興味のある方はぜひ当センター養成研修課(03-3204-3611)までお問い合わせください。

最後に、お忙しい中このワークショップに参加していただいた皆さん、企画から実施までご協力いただいた委員・講師の方々にお礼を申し上げます。



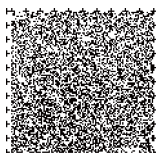


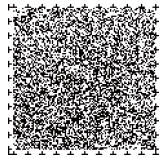
平成22年度 第2回障害者施設職員研修会 (機能訓練・健康管理担当者コース)

■実施要項

- 1 目的** 障害者施設等の機能訓練担当者及び健康管理担当者に対し必要な知識、技術等について研修し、障害者支援サービスの向上と施設運営の円滑化を図ることを目的とします。
- 2 主催** 全国身体障害者総合福祉センター（戸山サンライズ）
（厚生労働省委託事業）
- 3 開催場所** 全国身体障害者総合福祉センター（戸山サンライズ）
〒162-0052 東京都新宿区戸山1-22-1
TEL 03(3204)3611（代） FAX 03(3232)3621
- 4 期間** 平成22年10月13日（水）～10月15日（金）
- 5 対象者** 障害者施設等において機能訓練、健康管理等を担当する者。
- 6 定員** 70名
- 7 カリキュラム**
- ・ 障害者福祉の動向と機能訓練・健康管理
 - ・ 機能訓練と健康管理
 - ・ 障害者の機能訓練の意義
 - ・ 福祉用具の活用と機能訓練
 - ・ 障害者の医学特性と機能訓練
 - ・ 脳血管障害者の運動療法
 - ・ 重症心身障害児・者の運動療法
 - ・ 知的障害者の運動療法
- 8 必要経費**
- | | |
|--------------|---|
| ①研修費 | 12,000円 |
| ②懇親会費 | 2,000円（希望者のみ）
（懇親会は初日の講義終了後17:30～18:00開始予定です。） |
| ③宿泊費（1泊朝食付き） | 5,000円（希望者のみ・相部屋） |
| 〃 | 6,500円（〃・個室・健常者） |
| 〃 | 5,000円（〃・個室・障害者） |
- （宿泊費は、宿泊をする日数分ご用意いただきます。）

- 9 申込方法** 受講申込書を全国身体障害者総合福祉センター（戸山サンライズ）へお送りください（受講申込書は当センターホームページに掲載しております）。ホームページからのオンライン申し込みも可能です。
FAXにて申し込む場合は、送信後、必ず当センター養成研修課まで受信の可否を確認してください。





10 申込締切 平成22年8月27日（金）**必着**

11 受講決定 平成22年9月3日（金）頃、受講決定通知を発送予定。
（受講申込者宛てに受講決定・受講不可を問わず通知いたします。）

12 修了証書 全課程修了者には修了証書を授与します。（欠席・遅刻・早退の著しい者には授与しない場合がありますのでご注意下さい。）

13 宿泊申込 当センターに宿泊を希望する受講者は、宿泊申込書によりお申し込みください。
個室利用はご希望に添えられない場合がありますので、ご了承ください。
なお、できる限りキャンセル等変更がないようにお願いします。

全国身体障害者総合福祉センター（戸山サンライズ）刊行物のご紹介

全国身体障害者総合福祉センター（戸山サンライズ）において、刊行した書籍をご案内いたします。
送料のみのご負担でお手元にお届けします。

ご希望の方は当センター養成研修課までお問い合わせください。

電話：03-3204-3611 ファックス：03-3232-3621
E-mail：kensyu@abox3.so-net.ne.jp

※数量に限りがございます。在庫切れの際はご了承ください。

「自立支援協議会のあり方を探る」

～都道府県自立支援協議会の機能と役割～（2010年3月 厚生労働省障害者保健福祉推進事業）

4つの県の事例を交えながら、都道府県自立支援協議会の機能と役割について解説した書です。

- 第1章 都道府県自立支援協議会の現状
- 第2章 都道府県自立支援協議会の機能と役割
- 第3章 都道府県自立支援協議会の実践例
- 第4章 都道府県自立支援協議会の活性化に向けた重要ポイント
- 第5章 これからの都道府県自立支援協議会

戸山サンライズ（通巻第247号）

発行 平成22年6月10日

発行人 （財）日本障害者リハビリテーション協会
会長 金田一郎

編集 全国身体障害者総合福祉センター
〒162-0052 東京都新宿区戸山1-22-1
TEL. 03 (3204) 3611（代表）
FAX. 03 (3232) 3621
<http://www.normanet.ne.jp/~ww100006/index.htm>

